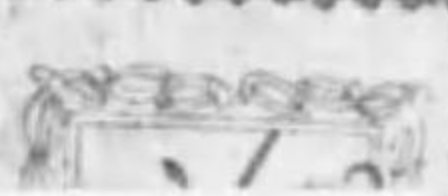


194



特241

145

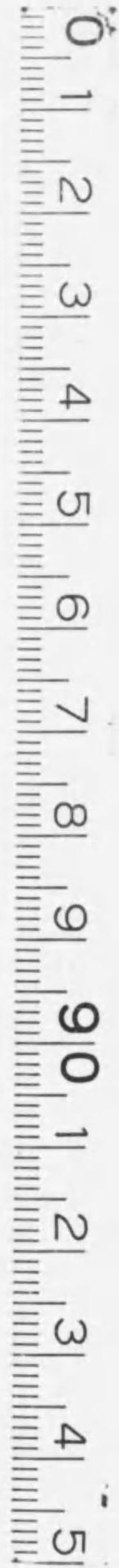
×  
複写

# 東日と讀賣の暗闘

## 正力は何故刺されたか

### 公判廷熱田佐の陳述

10



# 始





特241  
145

城南山人著



東日と讀賣の暗闘

東京東亞書房





## 目次

新聞暗黒面を暴露する……………	(五)
讀賣新聞社長斬らる……………	(六)
熱田 佐 登場……………	(七)
その日の公判廷……………	(八)
豫審決定書の内容……………	(九)
武神會とはどんな會か……………	(一〇)
正力襲撃犯人長崎との關係……………	(一一)
東京日日に頼まれた……………	(一二)
讀賣新聞工場襲撃計畫……………	(一三)
吉武鶴次郎氏との會見……………	(一四)
正力を殺さなくてはいかん……………	(一五)
後事は引受ける殺つてくれ……………	(一六)



四

驚いた岡崎東日重役……………(二六)

丸中販賣部長の變死……………(二六)

東日と熱田佐との關係……………(二九)

保釋されたお祝金……………(三)

頻々と受取る多額の金……………(三四)

丸中と仲違ひになる……………(三六)

反對に脅される……………(三九)

丸中の行爲を云ひふらす……………(四〇)

正力にぶちまければ面白い……………(四二)

吉武専務から一千圓……………(四五)

打消す岡崎重役……………(四七)

朝日新聞を襲撃せよ……………(四八)

脅喝の犯意を否定……………(五〇)

## 東日と讀賣の暗闘

城南山人

### 新聞暗黒面を暴露する

社會の公器こうきなど、巾はつたい口を利き他人の迷惑めいわくなどお構ひなしに書立てる新聞しんぶんが事ひたとび自分の問題もんだいとなると恥はぢも外聞ぐわいぶんもなくひたすら沈黙ちんもくの戦法せんぽうをとり『報道の天職』を抛なり出して仕舞ふ。だから新聞社内部の暗闘、新聞社同志の繩張なはばり争ひ等の醜惡しうあくはおよそ一般大衆の視野の外にある。或る新聞社の幹部が他社の幹部を殺させようとする——こんな大きなニュースでさへ總ての新聞は一切これを默殺して闇から闇へと葬つてゆく。然しかゝる重大な不正が大衆の無關心の裡うちに片付けられるべきでないことは勿論である。私はいま『公平な正義』に基いて鐵火てつかの放列を布き此の新聞暗黒面を防衛ぼうゑいする陰慘いんさんなベトンを打壊たぐわいし大衆の批判に訴へんとするのだ。



## 讀賣新聞社長斬らる

讀賣新聞社長、正力松太郎氏（當時五十一歳）が昭和十年二月二十二日午前八時四十分頃京橋區西銀座の同社に出勤し社前で自動車を下り編輯局への階段を上らうとして守衛と立話中、掲示新聞を讀んでゐた茶褐色の背廣を着た三十歳位の壯漢が、一尺二寸餘の日本刀を揮つて背後から躍りかゝり正力氏の左頭部に斬りつけた。

強氣な正力氏はそのまゝ日本刀を拂ひ退けて黙々として階段を上つて編輯局に入つたため居合せた人々もこの椿事ははつきり判らず、噴出する血を見て初めて大騒ぎとなり、正力氏を隣接の同社診療所に擔ぎ込んで手當を加へたが傷は長さ十五センチ、深さ八センチに及び幸ひ動脈は外れてゐたが出血多量で一時は重態とさへ傳へられたのである。

犯人は正力氏にはね退けられたまゝ再度襲はうとはせず、その儘丸の内署に自首したので前田署長より直ちに本廳へ報告、東京地方検事局よりは木内検事、警視廳よりは高野刑事部長、渡邊係長以下が出張取調べの後身柄は警視廳に移された。右犯人は東京市下谷區御徒町一ノ一三武神會青年部長長崎勝助（當時三十歳）で熊本市春竹町八十九番地に生れ郷里の小學校卒業

後昭和四年三月警視廳巡查となり王子署に勤務したが、同年九月同署を辭しその後雑誌『強化』を發行して國粹主義を鼓吹し、元東京日日新聞社員であつた熱田佐（當時四十一歳）の主宰する武神會に入り青年部長として柔道四段の腕前を以つて同會の道場を預つてゐたものである。

その傷害理由として擧げられてゐるものは同社が會つて招聘した日米野球團が、明治神宮の神域を汚したとか、美濃部博士の貴族員に於ける憲法論速記録が同紙に大々的に報道された事等であるといふのである。

然し、右翼團體青年部長と讀賣新聞社長——それをたゞ以上の如き理由のみによつて結びつけるのは餘りにも根據が薄い。その背後には必ずや大きな勢力が動いてゐるに違ひない。然し全國の新聞は傷害事件の寫眞師的報道以外は一切口を緘んで眞の原因は大衆の眼から引離されて仕舞つた。事件はそれで片付いたらうか？

## 熱田佐登場

否！先に述べた武神會々長熱田佐の東日幹部との往來はその後頗る頻繁となつた。そして會見を終へて歸る熱田佐の手には何時も數百圓、數千圓の金が握られてゐるのだ。そこには何



か素晴らしい謎がなければならぬ。

そして餘りに度重なる熱田佐の金錢受領は遂に當局の疑惑を招いた。熱田佐は召喚された。喜ぶべき筈の東京日日新聞幹部は俄然動搖し始めた。販賣部長丸中一保氏は辭職すると共に失踪した。そして同氏が發見された時には餓死體になつてゐた。東日獨裁官たる觀あつた吉武鶴次郎氏は專務を辭任した。庶務部長大成積氏も退社した。

東日は何故斯くまでに動搖したか。興味はこの熱田佐の取調べに集まつた。然し豫審廷で述べられた彼の陳述はたゞ通り一邊のものだつた。然し昭和十一年六月二十三日、熱田佐の公判が一度開かれるや、事態は急轉した。彼の陳述は餘りにも深刻なる東京日日、讀賣の暗闘をぶちまけたからだ。正力讀賣社長襲撃のバックには東日が居たのだ。新聞罪惡史の一頁を彩る餘りにも生々しい血の記録が繰り擧げられたからなのだ。

## その日の公判廷

六月二十三日——梅雨に珍らしく晴れた夏の陽が東京刑事地方裁判所第四號法廷にさしこんでゐる。下林裁判長、吉江検事、辯護人は福本錠之助氏外六名、保釋出所中だつた被告熱田佐

等の顔が揃ふ。東京日日新聞幹部恐喝事件第一回公判が開かれた。時期は正に午前十時。

下林裁判長が型の如く被告の住所姓名を訊して後公訴事實を讀み上げれば、頭髮をキチンと分けた熱田佐は悠然とこれに答へてゆく、重苦しい法廷の空氣、傍聽席に氾濫する顔には脂汗が光る。何か不可解な豫感の中に續く低い聲。「正力讀賣社長襲撃に關し私は實は東日から頼まれた事があります——」と熱田佐は語り出したのだ。

豫感はずつた。裁判所が數ヶ月に亘つて調べ上げた唯一の證據、豫審調査書は徹底的に覆へされ、新聞の暗黒面はいま白日の下に晒し出されたのである。

## 豫審決定書の内容

豫審廷に於ける熱田佐の陳述は徹底的に覆へされた。だがその豫審決定書の内容は——  
被告は豫ねて皇室中心主義を標榜して會員數十名を有つ右翼思想團體たる下谷區御徒町一三武神會々長であつたが、昭和十年二月二十二日讀賣新聞社長正力松太郎を傷害した自己の配下であり武神會々員であつた長崎勝助の辯護料等に籍口して東京日日の販賣部長丸中一保に援助金手交を申込んだが、多少の援助を受けただけで侮辱されたのを憤慨し、正力傷害事件に關して



事實を捏造し丸中及び東日幹部を恐喝せんと企て、丸中は正力傷害事件に關係がないのに拘らず、昭和十年五月下旬から同年七月までの間數回に亘つて東日社長その他で大成積庶務部長、岸井壽郎營業局次長及び同人等を通じて、丸中一保及び同社専務取締役つ吉武鶴次郎に對して「長崎の事件は丸中販賣部長に頼まれて居たのだ。それに丸中が何の挨拶も援助もしないとは怪しからん、直接行動を起すぞ」と迫り、應じなければ東日の重役及び正力讀賣社長等への旨を發表して東日及び丸中の名譽信用を毀損し、東日幹部等に暴行を加へる等と脅迫畏怖させて同月十二日頃と同月十八日頃の二回に亘つて麴町有樂町東洋軒に於いて大成庶務部長を介し二千圓を交付させ恐喝を遂げたものである。——と。

### 武神會とはどんな會か

下林裁判長のよく澄んだ聲が法廷一杯にとほる。

裁「前科はないか」

熱「昭和十年三月に正力讀賣社長襲撃事件に關聯して警視廳に拉致されたが不起訴處分になりました。その外には有りません」

裁「經歷は？」

熱「學校は二松學舎を出しました。正力傷害事件以後は柔道の道場を解散しました。道場を開いてゐる間の月収は三百圓位で以前の貯蓄が三萬圓位あつた。道場を開いてゐる間は乾分を十數名持つてゐて、趣味は柔道で講道館三段の免許を受けてゐました」

裁「武神會はどんな會か」

熱「武神會は昭和六年六月廿五日に創設しました。これは皇室中心主義を信條としたもので講演會を催したり雑誌を刊行したり青年に柔道を教へたりしてゐました」

裁「日本人で皇室中心主義を考へない者は居ない筈ではないか。被告はなぜさういふ特殊な仕事をやつてゐたか」

熱「當時上智大學々生の靖國神社不參問題が起りましたので力を入れました」

裁「それは何年頃か」

熱「昭和八年頃かと思ひます」

裁「武神會は昭和六年に創設したと言ひ、今また昭和八年頃といつて時日に喰ひ違ひのあるのはどういふ譯だ」



熱「武神會は前から道場としてあつたのです。それが靖國神社不參問題が起きてから思想方面の仕事をするやうになり月刊雑誌を出しました。そして會員は五六十名位、幹事長は袋井俊雄、青年部長は長崎勝助（正力讀賣社長襲撃犯人）でした」

裁「その會は何時まであつたか」

熱「いまも存續して居ります。然し私が去る十年三月十五日警視廳を釋放されて後は有名無實のものとなつて仕舞ひました」

裁「武神會は思想團體としてはどんな活動をやつたか」

熱「講演會のやうなもの——例へば青山會館で國民精神作興の會を開きました。例の靖國神社不參拜問題についての討論會もやりました。この外に防空講演會も」

裁「講演會だけか」

熱「これ等の講演會の趣旨を徹底させるためのパンフレットも出しました。また月に二回位雑誌も出してゐました」

裁「その會の財政的基礎は誰かの寄附によるものか」

熱「いや全部私財を投じてやつたものです」

裁「武神會の經營費用は一月どの位かゝるか」

熱「月によつて差があり一概には申上げられません」

### 正力襲撃犯人長崎との關係

この邊から裁判長の質問は正力社長襲撃問題に關聯を持ち出し法廷は頓に緊張する。

裁「長崎勝助とはどうして知り合ひになつたのか」

熱「門人としてです」

裁「それは何時頃だつたか」

熱「昭和四年頃です」

裁「長崎はどんな青年か」

熱「眞面目な青年で柔道もよくやりました。それで會の柔道部長と青年部長とを兼ねて居りました」

裁「どんな思想をもつて居たか」

熱「申上げる程のものはなかつたやうに思ひます」



下林裁判長の顔を照して居た夏の陽ざしが丘から通り過ぎた雲にせかれて一寸暗くなる。咳  
一つする者もなく。

裁「長崎は正力讀賣社長を傷害した事があるね」

熱「ございます」

裁「この事件に被告熱田佐は関係があるか」

熱「ありません」

少しもこだはつたところのない明朗な調子だ。滿廷は一齊にどよめき裁判長の瞳が光る。矢  
繼早の質問だ。

裁「長崎は被告の影響によつてやつたのではないか」

熱「さうは思ひません」

裁「それでは長崎はどうしてそんな事をしたのか」

熱「私には判りません」

裁「被告はその事件の起つた事情を知つてゐたのではないか」

熱「存じません」

裁「被告は正力に反感を持つて居たのではないか」

熱「決してそんな事はございません」

### 東京日日に頼まれた

熱田佐の答辯は静かな低い聲だ。訊問臺に注がれる滿廷の眼は何か奇怪な豫感に戦いてゐる。  
嵐の前の静けさとはこんな事をいふのだらう。熱田佐は遂に切り出した。裁判長の上半身が乗  
り出して来る。

熱「私は實は東日から頼まれたことがあります」

裁「言つてみよ」

熱「けふの日まで警察でも検事にも豫審判事にも申上げなかつた事があるのです。隠してゐた  
事は申譯ないのでしたが——故人となつた丸中のことを考へ、また長らく世話になつた東日、  
大毎のことを考へて黙つてゐたのです。然しそれを申上げたいと思ふのです」

裁「フム、どんな事を東日から頼まれた」

熱「正力讀賣社長傷害についてです」



いままで大衆から隔離され窺知することすら許されなかつた新聞の暗黒面が公判廷を通じて世の注意の中に片鱗を現したのだ。

熱「昭和九年十一月四日のことでした。當時東日の販賣部長だつた丸中一保が私を呼んだのです。そして現在の東日の現状を語りました。それは以前百二十萬もあつた發行部数が七十萬位に減つてゐる。社はもうどうにもならない行詰りに陥らうとしてゐる。それは最近非常な勢ひで伸びて來た讀賣の爲なのだ。どうか東日の爲に一骨折つて貰ひたい。それには是非讀賣新聞の工場を襲撃して紙を一枚も出せない様にして呉れと涙を流して丸中が頼んだのです」

裁「被告は何と答へたのか」

熱「それは大問題だと丸中に申しましたが丸中は今のまゝではどうにもならん、是非とも頼む、でなければ東日は行詰るといふことでした」

### 讀賣新聞工場襲撃計畫

裁「それでどうした」

熱「それでは誰か外の人を探して何とかしてみようと私は熟慮の結果申しました」

裁「いつの事だかもう一度言つてみよ」

熱「昭和九年十一月四日のことです。そして家に歸つて幹事長だつた袋井に東日といふ名を出さずに讀賣工場を襲撃しようと思ふが何とかならぬかと申しました」

裁「袋井は何と言つた」

熱「あなたの言ふ事なら聞かぬ譯にはゆかぬと申しました」

裁「袋井がやると言つたのか」

熱「大崎に下田熊之助といふ友人がゐるからそれに話してやらせようといふことでした」

裁「そして」

熱「十一月の八日だつたと思ひますが袋井が下田にその事を話したさうです。すると下田は、君が明日でもやれといふのなら直ぐにでも手を貸すと返事したさうです。それで私は丸中に



その旨を話しました」

裁「それはいつだ」

熱「同じ日です。えゝ八日の事です。私が丸中にその事を話しますと丸中は非常に喜んで二人で酒を飲みました。その時丸中は私に二百圓呉れました」

訊問はいよゝ東日との連絡の核心を衝く。廷内の暑さに裁判長以下の額には汗が滲み出す。熱田佐の陳述もともすれば聞えなくなる。

熱「讀賣の工場を襲撃するのには三四千圓はかゝる。それは實行して刑務所に連れて行かれた者に差入れをやつたり辯護士をつけるとどうしてもさうなると私が申しました。丸中は直ちに宜しいと承諾してから何日に着手するかと尋ねましたので十一月十五日に決行しよう。それには差し當つて千圓ぐらゐ金が必要と申しました」

裁「その十一月十五日にはどうした」

熱「午後三時頃でしたか私と丸中とは原宿驛で落ち合ひ明治神宮に参拜して代々木の練兵場に出て話しをしました」

裁「何の話しか」

熱「丸中は金はいくらでも出すから早くやつて呉れと繰返し頼みました」

裁「それでどうした」

熱「その晩午後五時頃でした。上野の小料理屋で袋井と下田が待つてゐる手筈になつて居たので私は参りました」

裁「どんな相談をやつたのか」

熱「襲撃するのに金が幾ら要るかと相談しました。袋井は五百圓もあればと言つたのですが結局六百圓といふことに決めました。そして私が前に丸中から貰つてゐた八百圓の中から六百圓を出し更に袋井には當座の小遣錢にと言つて五十圓手渡しした。下田は讀賣工場を襲撃して紙は一枚も出させないやうにしますと引受けてその晩は別れました」

裁「フム」

熱「その後丸中から非常に督促を受けました。どうして早く實行しないのかといふのでした」

### 吉武鶴次郎氏との會見

熱田佐の陳述は遂に東日營業局長であり専務として社内に儼然たる勢力を持つてゐる吉武



鶴次郎氏の名を持出した。

熱「その後私は吉武營業局長に會ひました」

裁「うっだ」

熱「はつきり覚えては居りませんが何でも昭和九年十一月初旬の日曜日のことでした。正午から三時位まで前後三時間位にも互る長い話をしました」

裁「吉武は何と言ったか」

熱「内容は忘れましたが覚えてゐるところはかうです——正力といふ奴は非常に悪い奴だ。あ

あいふ奴は臍懲した方がよからうと言ひました」

裁「その後吉武と會つたことがあるか」

熱「會ひはしませんが、その時の會見で讀賣の工場襲撃は東日の社としての方針であることは間違ひないといふ事を知りました。そこで私は吉武と別れると直ぐ工場襲撃をなぜ早くやらないのか、早くやらないと俺の顔が潰れて仕舞ふではないかと袋井に申しました」

裁「袋井は何と言つた」

熱「下田の考へでは工場の襲撃は多人數にもなるし従つて経費も犠牲者も多い。それよりは

つその事正力社長を斬つた方が良いと言つて居たと申しました」

裁「それで被告はどうしたのか」

熱「その結果を丸中に話しました」

裁「いつ？」

熱「十一月の下旬でした。もつとも袋井は決行するには二三日待つて呉れと言ひましたが」

裁「丸中との會談内容は」

熱「下田の意見を話したのです」

### 正力を殺さなくてはいかん

裁「正力を斬るといふ事をか」

熱「さうです。すると丸中は斬るとか何とかいふ程度では駄目だ。その位ならやらない方がいいと強硬に主張するので私も弱りました。で、どうすればいゝと訊き返しますと丸中はおういひました——讀賣は正力の獨裁政治なのだから正力を殺せば讀賣は潰れるに決つてゐる。あれを是非殺してくれ、さうすれば東日は安泰だ、とかう頼むのです。私もこれには弱りま



したがまあ何とか先方に話してみようと言つて別れました」

裁「それについて被告は意見を述べなかつたか」

熱「私がかういふ問題で人を斬つたりしてはならないと思つて居ました」

裁「その斬るといふのは傷けるといふのか殺すといふのか、どちらだ」

熱「殺す方の意味です。ですから私としては殺すことは良くないと思ひました。正力は兎に角讀賣をあれだけのものに仕上げた人物なのだからそれを無碍に殺すなどは思ひもよらぬと思つてゐました。それで何とか先方に話してみようといふ程度で別れたのです」

裁「袋井に會つて話したか」

熱「はい、袋井に正力をぶつた切つてくれとは申しましたが、丸中は正力を殺して呉れとは言ふが自分には殺すだけの恨みはないからその程度にやつてくれと申しました」

裁「で——」

熱「その次にどこで正力を斬つたが良いかといふことになつたが、その點について丸中は正力の別荘、三田の自宅、自動車番號、どこかの新聞から切抜いま寫眞三枚と、讀賣への出勤時刻が午前八時三十分位だと書いたものをまとめて私に呉れました」

裁「場所は？」

熱「東日のそばの東洋軒の喫茶部でした。それと金を百圓とです」

裁「それを貰つたのだな」

熱「はい、その夜、袋井は逗子に發ちました」

裁「何をしに」

熱「正力の別荘を見に行つたのです。しかしどうも地理的に工合が悪いからとてこゝで決行するのはやめました」

裁「それではどうする氣だつたのか」

熱「いろ／＼調べてみましたが三田の自宅も悪いし一層のこと讀賣に乗込んで行つて社長室でやつた方がいゝと袋井が申しました。然しさうは言ふものゝ中々決行しないのです」

裁「そして」

熱「丸中からは頻々として催促が来る。さうかうして居る中に私は向島の待合に連出されて嚴重に追究されました」



## 後事は引受ける殺つてくれ

裁「丸中はどういふのだ」

熱「君が手を下してやつてくれないかと頼むのです。丸中が言ふにはその代り家族のことなどは心残りないやうにしてやる。これは東日の社としての方針なんだから間違ひないといふのです」

裁「承知したのか」

熱「考へて見ると申しました」

裁「さう言つたのか」

熱「はい——で結局この計畫は下田に實行する意志がないのでそのまゝになつて仕舞つた。

その後十一月二十八日の晩に丸中の家に行つて千五百圓ばかり補助してくれと頼みました」

裁「何の金か」

熱「私が出してゐたパンフレットに吉武營業局長が社として千圓出すと言つて置きながら實際は五百圓しか呉れなかつたのでその補助をしてくれと前に丸中に頼んでおいた事があります

その金です」

裁「さうか」

熱「その翌日——二十九日に例の東洋軒で千五百圓を十圓紙幣で貰ひました」

裁「その時正力を斬る話が出たか」

熱「いゝえ出ません。その話はまだ立ち消えになつてゐました。私が金を渡した方でも正力を斬るのがいやになつたらしいのです。その儘になつて仕舞つて居たのです」

裁判長は少し考へてゐる風だつたがやがて口を切つた。

裁「そちらの話が駄目になつたのでそれで被告が長崎に正力を斬れといつたのではないか」

熱「いゝえ違ひます」

裁「ウム」

熱「長崎には話したことはありませんから長崎はこの事は知らない筈でした」

裁「被告はそれをどう處理しようと思つてゐたのだ」

熱「私はたゞ頼まれたからその通りに動いてゐたので別にどうしようとも思つて居ませんでした。そのうちに突然長崎が正力を襲つたと聞かされたのです」



裁「長崎と袋井との間に何か相談があつたのではないか」  
熱「ないと思ひます」

### 驚いた岡崎東日重役

裁「被告は下田をどうして知つてゐるのか」

熱「下田は袋井の友人でその紹介で知りました。たゞそれ丈の關係なので彼の商賣さへ知りません」

裁「下田はいまどこに居る」

熱「豊多摩か千葉の刑務所でせう」

流石に語り疲れたやうに熱田佐は肩を落す。傍聴人も初めて知る新聞裏面の醜惡さに打ちのめされ呼吸もつけぬ様子だ。やがて熱田佐は聲を聞きまし乍ら續けるのだ。

熱「これ等を今まで検事にも豫審判事にも申上げなかつたのは私が長い間東日の厄介になつてゐたからです。いまでも自分に關係のある者が百人以上も東日に働いてゐます。それに正力襲撃事件が起きた後に私は東日の重役岡崎氏に會つた事があるのです」

裁「何を話した」

熱「丸中が正力に對して考へてゐた事を話しました」

裁「岡崎は驚いたか」

熱「はい、丸中は赤門出の非常に信念の強い男だが、それがそんな事を考へたとすれば由々しい大問題だ。東日も大毎も重役は總辭職をし、會社も解散して罪を天下に謝さなければならぬと申しました」

裁「それで被告は」

熱「私もこれは東日にとつて大變な問題であると今更に感じ、この事は絶対に口外してはならないと決心を固めました——そして其の後丸中から二千圓、東日の元庶務部長大成から一千圓を恐喝した事にされて警視廳に拉致された時も、恐喝などしなくても東日からは金が貰へるのだといふ理由を説明しようかと思ひましたが、それを言つて仕舞へば東日には一大事が來ると考へ甘んちて恐喝の罪名を着せられたのです」



## 丸中販賣部長の變死

裁「それで」

熱「兎に角東日、大毎が解散するとなれば配達員だけでも何萬といふ人が食へなくなる。それを思ふと縛られて行つた方がいゝと思つたのです。ところが私を恐喝罪で突き出した東日は私を留置場に入れて置いて色々な採消し運動をやりました。だから私が出て來てみると丸中は死んで居る。實に氣の毒で堪らない。丸中が考へた事が假令悪いところで東日にとつては柱石です。その人物をどう東日で取扱つてゐるかといふと全く逆賊扱ひである。丸中の遺族に對してもろくに面倒も見をい。實にけしからんと思つてゐました。これは保釋出所して初めてはつきりとしたのでした。そこで私は憤慨の餘りその真相を初めて裁判長殿に申上げるのです」

新聞裏街道はこの熱田佐の供述によつて明るみへさらけ出された。傍聽人も果然裁判長も眼を一杯にみひらいてゐる。熱田佐の體も強い衝動に打たれ微かに震えてゐる様だ。言葉が少しでも途切れれば何か不氣味な沈黙が襲ひかゝらうとする様だ。

裁「丸中が昭和十年十月二十四日に家出してその後變死したのは間違ひないね」

熱「はいさうです」

裁「東京日日が丸中を殺したやうなものだね」

熱「はう」

陰鬱そのものゝ様な聲だ。

## 東日と熱田佐との關係

次いで裁判長は東日と熱田佐の關係について質問を始める。

熱「東日はあの震災後に紙數百萬部突破の祝賀會を挙げましたが、それには私が陰になつて骨を折つた効果が非常にあるのです。またその頃の管理課長下村氏に依頼されて販賣部關係の爭議を取り鎮めた事も二十回もあります」

裁「被告は東日をよしてからも東日に抗議を申込んだことがあるね」

熱「あります」

裁「何回くらゐか」



熱「大阪府知事の足止め問題や記事掲載禁止中だった臺灣編隊飛行の事を書いた問題など何でも四回ばかり抗議を申込んだ事を覚えて居ます」

裁「その抗議の氣持は」

熱「良くないから反省させる爲です」

裁「現在の東日への感情は」

熱「好意をもつて居ります」

裁「長崎はどこに住んでゐたのか」

熱「正力襲撃當時は武神會の道場です」

裁「長崎が正力を刺したのは昨年二月二十二日の朝九時頃だったと思ふが、その朝被告は長崎に合はなかつたか」

熱「會ひません」

裁「その前の日は」

熱「やはり會ひません」

裁「長崎は丸中に頼まれて正力を斬つたのではないか」

熱「そんな事はないと思ひます」

裁「袋井が丸中に長崎を紹介したのではないか」

熱「さうではないと思ひます」

裁「被告は警視廳から釋放されるとその後東日幹部と會つたさうだね」

熱「會ひました」

裁「理由は」

熱「留置中に種々と世話になつたお禮にです」

晴れてゐるとは言へ梅雨季節。餘りに激烈なその陳述、ムツとする人いきれと異状なシヨツクとでか廷内の顔といふ顔はお能の面のやうに無表情だ。下林裁判長も漸く疲れがみえるやうだ。午前の公判はこれで打切られた。

### 保釋されたお祝金

熱田佐の東日の幹部恐喝事件續行公判は午後一時五十分開始された。廷内は又もや満員だ。裁判長の訊問が始まる。



裁「被告は警視廳を保釋されてから東日の重役岡崎、幹部では大成、小泉、丸中、岸井等に會つたな」

熱「はう」

裁「いつ頃だつた」

熱「昭和十年三月の半ば頃でした」

裁「大成と會つたのは」

熱「三月十六日頃です」

裁「金を三百圓貰つたね」

熱「さうです」

裁「それはどんな筋の金かね」

熱「私が留置されてゐた時には丸中、大成、小泉等から家族の生活費を貰つてゐましたが、大成から貰つたその金は放免された祝ひとしてです」

裁「祝ひ——かね」

熱「さうです」

裁「大成個人として貰つたのかそれとも東日の社からかね」

熱「社からです」

裁「どうして祝ひを受けるのか」

熱「別にどうしてか分かりません。然し東日とは長い關係がありますから——」

裁「その翌日だね、小泉と會つたのは」

熱「さうです」

裁「紙袋に入つた金を二袋もらつたな」

熱「さうです」

裁「幾ら入つてゐた」

熱「百圓札一枚づゝです」

裁「どうして貰つたのか」

熱「岡崎、杉山兩重役からの放免祝としてです」

裁「すると小泉は岡崎、杉山の命令でその金を被告に渡したのだね」

熱「さうです」



裁「その紙袋を渡す時に小泉は何か言はなかつたかね」

熱「放免になつてお芽出たう。これからは右翼として、まじまじにやつてくれ、さうすれば重役連も立派に面倒みてくれるよと言ひました」

裁「武神會の會長を袋井に譲つたのもその勧めによるのではないか」

熱「さうです」

裁「被告は武神會から手を引いて正氣塾をつくる積りだつたな」

熱「さうです」

熱「それについて東日に金の無心をしたらう」

### 頻々と受取る多額の金

熱「大阪にあつた國粹社會大衆黨の笹川良一が飛行場を開設するとかで大毎から五百圓貰つてゐた。そんな關係のない方に金を出す位なら關係の深い私の方にくれと申しました」

裁「その當時丸中にも會つて援助を求めたな」

熱「はう」

裁「どこで會つたか」

熱「東洋軒の地下室か東日の應接室かよく覚えて居りません」

裁「金に困つたか」

熱「さうです、警視廳に長く居たのでいろいろ金の必要が出来まして、さきに申上げた應接室か地下室かで丸中に頼みました」

裁「何と言つてか」

熱「正力の傷害事件について差入れや辯護士の支拂ひやその他いろいろ金の問題で應接してくれと申しました」

裁「いつ頃だつたか」

熱「五月の半ば頃でした」

裁「丸中とは懇意だつたのか」

熱「非常に懇意でした。去年の十月頃でしたか九段の某待合で丸中や大成と一緒に飯を食つた事があります。その時など丸中はおいお前と兄弟分にならうぢやないかとさへ申しました」

裁「何でそんな事を言ひ出したのだ」



熱「それはいま日本で崇敬出来るのは頭山翁位のものだ。あんな立派な人物になるなら兄弟分にならうと申しました」

裁「そんな仲なのに何故憤慨したのか」

熱「丸中が最後に嘘をつきましたから」

裁「嘘？」

熱「私に援助してやると言ひながら僅かな金しかくれませんでした」

裁「それで」

熱「丸中は千五百圓もの金はちよつと出来ないから五百圓だけ今こさへてやる明日社へ取りに來いと申しました」

### 丸中と仲違ひになる

裁「それで被告は行つたのかな」

熱「はい、然しその翌日社に丸中を訪ねると不在でした。そのまた翌日は會ふことは會ひましたが丸中はポケットから三百圓を机の上に投げ出しました」

裁「丸中は何と言つたか」

熱「なんだ、あれつばかしで——殺しもしないのに援助が出来るものか。馬鹿野郎ツとさへ申しました」

裁「それでお前は」

熱「貴様は本氣でさう言ふのかと私は言つてその金だけを受取つて歸りました」

裁「紙幣か」

熱「十圓紙幣でした。むき出しの儘受け取つて歸つて來たのですが、五百圓くれる筈のが三百圓でしたし、私は丸中に良い感じは持てませんでした」

裁「丸中はその金をどこから都合つけたのか」

熱「社からせう」

裁「では被告は金を社から貰ふ積りだつたのか」

熱「丸中からです」

裁「丸中はそんな金持か」

熱「金持ではないでせうが一萬圓位収入があつた様です」



裁「その位の収入があつても、さう大きな金をあちらこちらにつき合ふ事は出来まい」

熱「然し丸中には相當資産もあり東日でも大株主だったのですから金はよく廻りました」

裁「千五百圓も請求すればその爲に丸中の家族が困るなどは考へなかつたか」

熱「家族に影響など、ないと思ひます。丸中は東日の販賣部長として年に五十萬から七十萬圓ぐらゐ自由に使へる金を持つて居ましたから」

裁「然し結局被告は東日が援助すると思つたらう」

熱「まあさうです」

裁「丸中が約束した金はくれないしその態度も悪いしするから、被告はそれに復讐しようと思つたのか」

熱「復讐といふ様なものでなくたゞ丸中を少し困らせてやらうくらゐに思つてゐたのです」

裁「で、被告は長崎が正力を傷害したのは被告が丸中に頼まれたのが原因だと言ひふらしたのか」

熱「さうです」

裁「丸中だけ困らせる積りだつたのか、それとも東日の幹部をみな困らせるつもりだつたか」

熱「丸中だけです」

裁「丸中が千五百圓をつくらなかつたのは東日の幹部が金を出さなかつたのではないか」

熱「その點は判りません」

裁「被告はさうだと考へないか」

熱「さう考へません」

裁「そんな事を言ひふらせば東日の幹部が無論困ると思つたらう」

熱「それはよく判つてゐました。だから重役に言つた文でそれ以外の者には申しませんでした」

裁「丸中や東日の幹部を脅して金を取らうと思つたのではないか」

熱「いえ違ひます」

裁「フム」

## 反對に脅される

熱「こんな事さへあります。私は大塚の待合で丸中の部下である東日社員と會つたことがあります」



ます。たしか夜の一時頃でしたが、丸中の言傳でだが大成と手が切れるかと申します』

裁「お前は何と答へた』

熱「いつでも切つてみせると』

裁「すると』

熱「するとその男が何だか變な言ひが、りをつけるので私は憤慨して、何か丸中から頼まれて来たのかと訊きますとさうだと申します。そして君も妻子があるのだから妥協した方がいゝ、さうすれば月々二三百圓といふ様に一生食へるだけの金はやる。お前が道場を引越したりするのなら四五萬圓も出してやらう。しかしお前がそれを承知しなければお前は身邊に氣をつけろと脅迫されたことがあります』

### 丸中の行爲を言ひふらす

裁「被告は昭和九年五月中旬頃から七月頃まで數回に亘つて東日の幹部に會つて嘘のことを言ひふらしたな。さつき述べた丸中がどうかうしたと——』

熱「申しました』

裁「一體丸中は正力傷害事件に関係があつたのではないか』

熱「長崎のやつた事には関係がありませんが他の意味で関係があります』

裁「被告は保釋になつてから大成庶務部長に會つたね』

熱「はい』

裁「何を話した』

熱「東日は丸中に正力事件を起させておきながら丸中の遺族の面倒を見ないとは怪しからんと大成に言ひました』

裁「大成は何と言つた』

熱「それは大問題だと言ひました』

裁「被告がその當時やつたことは丸中だけを困らせることになるな』

熱「は？』

裁「被告は正力襲撃問題は東日の意志に基くものとして丸中を困らさうとしたのだね』

熱「はいさうです』

裁「大成か誰かゞそれを内所にして呉れと頼んだやうな事はないか』



熱「丸中さまへ」

裁「その後岸井營業局次長に會つたな」

熱「はう」

裁「どこでか」

熱「岸井の自宅です」

裁「どこにあるのか」

熱「麻布本村町」

裁「何を話したか」

熱「内容は殆ど憶えて居りませんが大體大成に話したことゝ同じだつたと思ひます」

裁「岸井の家からの歸りにまた大成と會つたね」

熱「さうです」

### 正力にぶちまければ面白い

裁「被告は大成に——長崎問題の裏面を東日の重役や正力のところへ行つてぶちまければ面白

う。とかう言つたのだな」

熱「はう」

裁「大成からは千圓貰つたね」

熱「はう」

裁「その金はどこから出た」

熱「吉武専務からだと思ひます」

裁「その後——さう同年の七月八九日頃大成の家で丸中と會つてゐるね」

熱「はう」

裁「どういふ用でか」

熱「丸中にはあつたらしいですが私にはありませんでした。まあ大成が心配して合はせた譯なのです」

裁「どんな話をした」

熱「丸中は私に援助の金を出すからもう一度國家の爲に働かないかといふやうな事でした」  
裁「大成とはどんな話をした」



熱「大成は私に向つて、丸中には君を援助する義理があるのにあんな態度をとるやうでは困つたものだ」と申しました」

裁「被告は大成に明日から行動を起すと言つて歸つたのか」

熱「はい」

裁「その行動とは何だ」

熱「重役を訪問する事でした」

裁「どうして大成にそんな事を言つたのか」

熱「大成や丸中は私とは隔意のない友人同志ですから」

裁「大成に盆が近づいたから金を都合してくれと頼んだね」

熱「はい」

裁「幾ら位欲しかつたのか」

熱「君の手許から千圓位都合つけてくれと申しました」

裁「それで翌日大成から電話があり會見を求められたのかね」

熱「はい」

### 吉武専務から一千圓

裁「大成は何と言つた」

熱「正力の問題では金は一文も出せないがと——言つて千圓くれました」

裁「その金はどこから出た」

熱「吉武専務でせう」

裁「丸中が正力襲撃に關係があつたことは東日の重役に解つてゐるか」

熱「吉武や岸井には解つて居たと思ひます」

裁「被告はその年の七月十八日に丸中から東洋軒で二千圓貰つたね」

熱「さうです」

裁「どうして貰つたか」

熱「それは豫審でも申上げました様に當然貰つても良い援助の金だと思ひましたから」

裁「その金はどこから出た」

熱「丸中か東日の機密費かのどちらかだと思ひます」



裁「その金はどうした」

熱「大成に貸しました」

裁「それから丸中とは」

熱「丸中からは五千圓貰ふ約束やくそくになつてゐました。ですから二千圓貰つた残り三千圓は八月一日の午後三時にくれることになつてゐました」

裁「丸中はどうしてそんな金を呉れたと思ふ」

熱「私に前からよく武神會をやめて眞面目な仕事をしろ、さうすれば援助すると言つたその援助の金だと思つて居ります」

裁「ふーん、丸中は被告に、正力の傷害問題しやうがいもんだいには丸中が關係してゐると言はれては困るのでその口止め料くちどめりょうとして貰つたのではないか」

熱「さう考へません」

裁「残り三千圓は貰つたか」

熱「丸中に二千圓位の半端では仕方がないと申しますと丸中はそんなに都合が悪くて仕方がないのなら勝手にしたらいゝぢやないかと申しました」

裁「被告は何と言つた」

熱「ぢやあ勝手にするぞと申しました」

裁「二人の仲が悪くなつたのはそれでか」

熱「さうです。そして結局残りの金が貰へなかつたために、家の引越ひっこしで金を使つたりして差引五百圓ばかり自腹じばらを切りました」

裁「大成に貸した二千圓の金はどうしたか」

熱「丸中に對して返させました」

裁「なぜ」

熱「五千圓まとまらなくては役に立たなかつたからです」

### 打消す岡崎重役

裁「その後岡崎に會つてゐるね」

熱「會ひました」

裁「どうだ」



熱「岡崎氏の自宅です」

裁「何を話した」

熱「正力襲撃について丸中が私に頼んだ事を話しました」

裁「すると岡崎は」

熱「事實だとすると重大問題だ。東日、大毎の重役は引責總辭職のほかない。然し君が言ふのは本當だとは思へない。恐らくそんな事はないだらうと申しました」

裁「それで」

熱「私は内心、岡會長にも會つて話しをしようかと思ひましたが遂に會へませんでした」

裁「その後また吉武と會つたね。何故だ」

熱「その中に長崎の公判があるし辯護士をつけるにも費用が要るしするので吉武に會つたのです」

### 朝日新聞を襲撃せよ

裁「吉武は費用を出したか」

熱「吉武の言ひますには——天皇機關説問題を社説で庇護するやうな態度をとつた朝日新聞は膺懲するのが當り前だ。それには君が率先して君らの十七團體で朝日を襲撃するのだ。それでもまだ懲なかつたら丸見屋、味の素、わかもと、資生堂、小林ライオンなどの十大廣告主が朝日に決して廣告を出さないやうにしてくれ。さうすれば金を出すと申しました」

熱田佐の陳述はいよ／＼奇怪である。轉落を續けてゐるとは言へ一時は發行部數百萬を遙かに超えた東日の専務吉武氏が朝日新聞襲撃等を唆かすとは。

熱「それはすぐ丸中に話しました」

裁「丸中は何と言つた」

熱「それはいい、實行しろと申しました」

裁「それで」

熱「その朝日襲撃と一緒に、かつての讀賣工場襲撃とを合せて丸中から三千圓貰ひました」

裁「大成や岸井に被告が言ひふらした事を言つて見よ」

熱「はい、丸中の奴はけしからん。人にものを頼んで置いて跡始末もしない。正力の傷害は丸中が頼んできたことではないかと申しました」



裁「小泉にも時々金の無心をやつたさうだね」  
熱「はい」

### 脅喝の犯意を否定

そして熱田佐は自發的に自分に恐喝暴行の意志が無かつたことを辯明し始めた。

熱「昭和十年の九月十八日の朝、私は警視廳に連行されましたが、これは東日重役間の暗闘から私の自由を拘束して置く必要を生じたものと考へました。然し私は最初から東日の重役を恐喝したり暴行したりする意志はこれつかしも持つては居りませんでした」

裁「でも被告が行動を起すぞと言つたのは直接行動を起す意味のやうにとれるがどうか」

熱「違ひます。私共の間の話はそんな意味ではありません」

裁「然しだね。相手方は直接行動の意味にとりはしないか」

熱「丸中や大成はみな私の友達です。この二人がそんな意味にとつたとは今でも考へて居りません」

こゝで下林裁判長は第一回公判の閉廷を宣したのである。傍聽人の顔にも並み居た判檢事の

面にも玉の汗が光つてゐる。晴れては居るもの、梅雨季節の弱い太陽が法廷の一部だけを明るく隈取つてゐた。丁度三時三十分。

熱田佐の公判は僅かにその第一回を終へたのみである。然しその中に既に一世を驚倒せしめる大陰謀が暴露されてゐる。正力讀賣社長襲撃、同社工場破壊、さらに東京朝日新聞社襲撃計畫等々。而して熱田佐が東日恐喝に使用した材料として傳へられるものは決してこれのみではない。曰く故本山社長の叙勳問題、曰く臺灣に於ける軍機密の掲載事件、曰く高石眞五郎主筆の社説取消など。會つては東日に籍を置き、退職後も同社の暗黒面を擔任してゐた熱田が今後如何なる怪事實を法廷にぶちまけるか。千古の祕境にも似た新聞街道からくりは私の手によつて都度、讀者の饗宴に捧げられるであらう。



いさ下

全書店販でし居ては買  
切のれは直本へ御注文

早く求める

吉岡義一 著	非常時日本の外交陣	定價十錢 (送料二錢)
高倉晃 著	逆巻く太平洋	定價十錢 (送料二錢)
小牧琢磨 著	財界巨星出世譚	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	怪奇犯罪實話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	見よ! 此躍進日本の姿	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	常識讀本・人生百課事典	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	明朗爆笑大會	定價十錢 (送料二錢)
牧山允 著	女スパイの暗躍	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄 著	要領百パーセント戦法	定價十錢 (送料二錢)
中村武郎 著	東西偉人逸話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	皇國軍人に懸ふ	定價十錢 (送料二錢)
陸軍中將 堀内文次 閣下 著	大西郷を語る	定價十錢 (送料二錢)
箱館小史 著	百年後の人種戦争	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順 著	政界財界膝栗毛	定價十錢 (送料二錢)
黒田正隆 著	世界の景氣は何時爆發するか	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四丁目二番六 東亞書房

願ひます

代金引替は御教を  
切手代用は二割増に

御注文は

五島富士夫 著	二・二六事件の記録	定價十錢 (送料二錢)
海南隱士 著	組閣難の真相 廣田内閣はどうなる	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄 著	千波萬瀾の生涯・人間高橋是清	定價十錢 (送料二錢)
齋藤一 著	遺難した内大臣 齋藤實とはどんな人か	定價十錢 (送料二錢)
頭山滿翁 著	重大國事の秘密を語る	定價十錢 (送料二錢)
村田和雄 著	歐洲の風雲・世界大戦は起るか	定價十錢 (送料二錢)
五島富士夫 著	國際珍聞奇聞集	定價十錢 (送料二錢)
滿蒙事報社 編	謎の秘境・蒙古の全貌	定價十錢 (送料二錢)
秋本孝雄 著	若返り法とホルモンの話	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	實話讀物・職業麗人純情集	定價十錢 (送料二錢)
斯波雪夫 著	國際情緒・ハルビン物語	定價十錢 (送料二錢)
片山哲平 著	映畫スタア千夜一夜	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	戰術奥の奥・外交は是で行け	定價十錢 (送料二錢)
加藤弘一 著	爆弾・護れ祖國日本	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順 著	世間の裏をのぞく	定價十錢 (送料二錢)
須山滿洲男 著	風雲を孕む外蒙古	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四丁目二番六 東亞書房



今評判の東亞書房の十銭文庫

海南隱士著	覺悟せよ！次の大戦争	定價十錢	(送料二錢)
藤原達策著	支那は動く	定價十錢	(送料二錢)
國際研究會著	日本の財政・何年戦争に堪えられるか	定價十錢	(送料二錢)
沼上良太郎著	必ずあたる新商賣往來	定價十錢	(送料二錢)
山門玉吉著	一讀鬼氣！妖奇怪談集	定價十錢	(送料二錢)
白木屋專務	立身出世虎の巻	定價十錢	(送料二錢)
山田忍三述	財閥功罪史	定價十錢	(送料二錢)
太田義孝著	世界珍奇怪奇見世物	定價十錢	(送料二錢)
奈緒順著	暗黒街往來	定價十錢	(送料二錢)
和田信義著	明日の世界	定價十錢	(送料二錢)
海南隱士著	戦線に躍る日英米の勝敗	定價十錢	(送料二錢)

發行所 東京芝区三田四國町二六 東亞書房 電話三三八八八番

人を求むる新大陸は招く

満洲の就職手引き

定價二十錢 送料二錢

滿洲へ雄飛して見たいがどらしたらよいか——と迷つてゐる人は本書をお読み下さい。本書はきつと貴方がたの良い道案内役を勤めるでせう。小學出も、中學出も、専門學校出も、乃至大學出も、又は現在職を持つて居る方も、新興國滿洲の職場がどんな状態であるかを知つたならばきつと雄飛せずにはゐられません。

發行所 東京芝区三田四國町二六 東亞書房

振替東京八八三〇番  
電話三田(45)三九八九番



滿蒙事報社編

定價五十錢 送料五錢

# 學資と就職の心配ない 滿洲官費學校案内

小學校又は中等學校を卒業して更に上級學校へ進まうとする者にとつての雜聞は何と云つても學費です。本書は學費のいらぬ然も就職率は百パーセントといふ滿洲の官費給費學校を詳細に懇切に紹介したものです。

東京市芝區三田四國町二六

發行所 東亞書房

振替東京八八三八〇番  
電話三田(45)三九八九番

滿蒙事報社編 定價五十錢 (送料五錢)

滿洲官費學校案内

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料三錢)

小資本で滿洲の職業百五十  
出來る種調べ

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)

人を求むる新大陸は招く

滿洲の就職手引き

東日と讀賣の暗闘

(定價十錢)

昭和十一年七月五日印  
昭和十一年七月八日發行

著者 城南山人

東京市芝區三田四國町二六

發行者 角田恒

東京市芝區山吹町二ノ五八

印刷所 東亞書房印刷部

東京市芝區三田四國町二六

發行所 東亞書房

振替東京八八三八〇番

電話三田三九八九番

鐵道各驛ホームスタンド一手販賣

鐵道保養會

不許複製

Printed in Japan





行發 **房書亞東** 京東

終

3  
29